

中国におけるインジゴ染色 Dyeing and Printing with Indigo in China

王丹 駒城 素子

DanWang and Motoko KOMAKI

(お茶の水女子大学人間文化研究科ライフサイエンス専攻)

1. はじめに

インジゴは"インドの石"を意味し、葉に含まれる indican から成る藍色の染料である。このインジゴを採るために利用されていた植物はインドにおけるマメ科のコマツナギ属 *Indigofera*、中国におけるタデ科蓼藍、沖縄でのキツネノゴマ科琉球藍などの数種がある。1883年に主成分が構造決定され、1897年に合成染料が出現したが、それ以前はインジゴが木綿に対して堅牢な青色を染めることの出来る唯一の天然染料として、特別なものであった。現代では合成インジゴが使用されている。

2. 中国における藍染めの歴史と伝説

中国では古くから染色技術が発達していた。紀元前 20 世紀には何種類かの鉱物と植物を利用して、黄色、赤、青、緑、紫、黒を染め出していた。これらの中で青色に染める染料は藍 (lan) でこれは染料の総称にもなっていた。(紅は日本ではクレノアイと呼ばれた。) 1972年に中国の湖南省長沙の墓から前漢時代の染色品が出土した。発掘当時その色は鮮明で、分析の結果、青の部分はインジゴ (靛藍, dianlan) であることがわかった。²⁾ (図1)

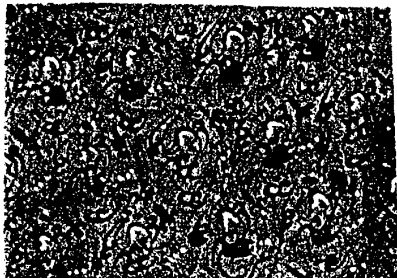


図1.長沙の墓からの発掘染色品

AD533—544年、賈思勰氏が書いた「齊民要術」の中に多数の植物染料の製造方法が書かれている。その一つは藍の製造法である。蓼藍の葉を細かくして、発酵させ、水を加えると、透

明な汁が出て来る。この中に帛布を浸すと染まる。(その液を混ぜると、酸素と反応して青い沈澱物が出て来る。)

中国では藍——インジゴの還元染色法に関して次のような伝説が普及している。³⁾

**昔、二人の職人——梅染師と葛染師がいた、布を青く染める染め物屋をやっていた。ある日、染色槽の中に残った藍の染料が沈澱してしまっただ。このことに気がついて、これは困ったどうしようかと落ち込んで葛染師は酒を飲んで酔っぱらってしまい、その槽の側に寝てしまった。そして無意識に誤って槽の中に酒を吐いてしまった。梅染師はそれを見て、慌てて、人に見られないように酒と沈澱染料を混ぜた。すると、奇跡が起こった。泥のような沈澱物が消えて、黄褐色の液になった。葛染師は酔いが醒めて、不思議がり、白布を槽の中に入れて引揚げ絞ったところ、青く染まった。こうして、アルコールを使って発酵を促進し、蓼藍沈澱物を還元する方法を発明した。後世は、梅、葛二人を染色業の宗師と呼んでいる。 **

この伝説が本当に事実かどうかはわからないが、藍が還元によってアルカリ可溶性の構造となり(恐らく石灰などを加え、アルカリ性になっていたであろう) 染着する原理がわかりやすく説明されているようである。インジゴ植物の染色槽内で起こる染料としての変化は素人にとっては全く魔術のようである。そこで見られる染料の溶けた色と実際に染め上げる色とは殆ど一致しない。

3. 捺染布 (藍印花布)

古来、中国では、特に南部の揚子江沿いに住む少数民族などが藍色を好み、インジゴによる捺染が行われた。これは中国全土といつてもよ

いほど広がって親しまれた。清朝時代には種々の精密な図案が考案された。



図 2. 中国昔の捺染品 (不死鳥と牡丹)

図 2 では身分の高い女性の象徴である"不死鳥" (鳳凰) が名誉と富の象徴とされている"牡丹"と共に描いてある。



図 3. 中国昔の捺染品 (獅子とボール)

図 3 は獅子がボールと撓むれているところである³⁾。この他長寿、慶事を示す"鯉"も描かれる。これらのデザインは現在でも中国の正月用の飾り物に使われており、いかにも中国らしい特徴の表れた図である。この藍捺染布は"藍印花布"と呼び伝統的な彫刻板防染捺染布である。すでに千何百年の歴史を持っており、秦漢時代に始まり、唐宋時代に盛んになり、明清時代に民間に普及した。その方法は板に模様を彫刻→糊付け→染色→糊除去→すすぎである。糊付けは、石灰と大豆粉を混ぜ、練り合せたものを防染糊として使っている。これは引続いて行う浸染に当って、染料を吸着しないように模様やシマ柄を防染糊でプリントして乾かすものである、(複雑な図案になると、二枚以上の型紙を使用する)次いで蓼藍の還元浴で地染めを行い、水ですすぐと防染糊が除去され、その部分が白く残り、繊細な点、線、模様が藍で染められた、すばらしい芸術品になる。⁵⁾

4. 浸染法

上記の捺染は実は浸染を行っていることにな

る、浸染については合成インジゴが使用されるようになるまで発酵建て法が普通に行われていた。その際、アルカリとして石灰が使用されていた。染料藍及び染浴の作り方は藍の葉を水槽にいれ、上から蓋のようなもので押さえ、一昼夜程おくと、発酵してインジカンが溶出するので、それを別の槽に流し入れて石灰を加え強く攪拌すると、インジカンは沈殿する。この泥状のものあるいはそれを乾燥させたものが沈澱藍(靛藍)である¹⁾。これにアルカリを加えて発酵を促進し染浴とする。この方法は、約 1 か月かけて蓼藍の葉を発酵させ染として供する日本の方法とは異なっている。

5. 近代のインジゴ染色。

1897 年に BASF 社が工業生産を始め、合成インジゴが出現して以来、天然藍との併用を経てだんだん合成品におき替わっていった。1947 年以後 Indigo 20% Paste が楊子江下流地方で最も多く使用され、他の地方では、(特に供給源から遠い地域では) さらに濃厚な Indigo Vat 60% 及び 80% Grain が使用された。還元法も発酵建てから亜鉛、ハイドロサルファイト法などに変わった。1950 年代初めに毛沢東の政策で外国から輸入したインジゴ染料の使用が禁止された⁴⁾。(それまでは労働着である"連体服"の染色に使用するため、中国が世界の IndigoPure の大きな市場を占めていた⁴⁾。)したがって、インジゴ染色品は日常から姿を消したが、最近は自由化され、再び輸入品と国産品のインジゴを使って、綿及び羊毛、シルク、などを染色した手工芸品を作っている。これらは、主に農村、少数民族区域の手織り布、花布、毛藍布などである。

参考文献：

1. 「日本の藍」 日本藍染文化協会, 1994.
2. 「中国大百科全書」 同書出版社, 1989.
3. 染色工業 6~9. (1958~1961.)
4. A Century of the Blues., J.S.D C. 112, 220 (1996)
5. 「印染」 紡績工業出版社, 1983.